

砥 部 焼



TOBE YAKI

砥部焼とは

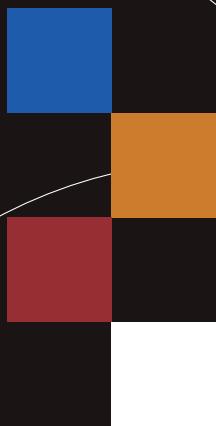
清らかな白磁の肌に溶けこんだ
藍色の絵模様（呉須絵）や、素地の絵
模様、やや厚手の飾り気のない形と
材質の硬さが特徴の砥部焼。手造り、
手描きの味わいと実用的なデザイン
が広く受け入れられ、暮らしの器と
して広く愛されています。

もともとは陶器として発祥しまし
たが、現在の砥部焼は約240年前、
特産品の伊予砥（砥石）の屑を利用
して磁器の開発に取り組んだのが始
まりです。四国一の生産を誇る磁器
の焼きもので、今でも約100軒の
窯元が軒をつらねています。

優れた伝統的工芸品としての歴
史と伝統は今も生かされ守り続け
られています。女性や若い世代の陶
工たちの活躍も目覚ましく、砥部焼
の魅力がさらに広がっています。

■目次

●砥部焼とは	1
●砥部焼の歩み	
・誕生編 ～砥部焼誕生秘話～	3
・成熟編 ～広がる砥部焼の世界～	5
・飛躍編 ～若い力が生み出す独創的な世界～	7
●砥部焼が出来るまで	9
●砥部焼の歴史年譜／砥部焼の先達	11
●窯の分布	13
●砥部焼ミニ資料館	14
●ひろがる・とびたつアートな砥部焼	15
●砥部焼に関する年間イベントスケジュール／施設	17
●砥部焼についての参考文献	18



砥部焼 の歩み

「砥部焼誕生秘話」

砥部焼が誕生して約240年になります。素朴で温もりのある砥部焼。そこには多くの陶工たちの苦難と努力に彩られたものがあります。先人たちが築いてきた焼きものの技と心意気は、数百年の時を経てもしっかりと受け継がれ、新たな歴史を刻んでいます。暮らしの中で育まれてきた砥部焼の歩みをたどってみます。

誕生編

■染付四君子紋徳利
(明治初期／五松斎窯)



陶器と磁器創業から

明治・大正時代

陶器では、松竹梅・魚などの素朴な絵模様
に、庶民生活に合った感覚がうかがえます。
古砥部時代の染付磁器は呉須(藍色の顔料)
の色合いや絵付の筆はこびに優れ、熟練した
ろくろ成型による形とよく調和して、砥部焼
の象徴的作品として貴重視されています。錦
絵は文政年間(一八一八〜一八三〇)に肥前
から伝えられ、明治初期まで使われた和絵具
の付き具合は安定していて、色合い、光沢とも
に華やかで美しいものです。模様は極細い筆
で丁寧に描かれた線や色彩の細かな絵です。
特に五松斎の作品は純白の磁肌に細やかな
上絵付を行ない、作陶の精巧さと絵の配置構
成、色合いの良さが砥部焼の代表作品と言わ
れ、後の砥部錦絵発達のもとになりました。
砥部焼の改良を思いつた向井和平(一八
四二〜一九〇四)「愛山窯」は淡黄色の磁
器(淡黄磁)を創り出しました。象牙色のあ
たたかい感じの磁器として、花器・置物・和洋
食器などがつくられ、シカゴ世界博覧会(一
八九三)に出品した作品は一等に入賞し、
砥部焼の名を世界に知らせました。



砥部焼 の歩み

砥部焼の長い歴史の中には大きな転機がありました。「伊予ボウル」と呼ばれた茶碗の輸出で、好景気が続いた時代。そして、開戦とともに衰退していった時代。民芸運動によって復活をとげていった時代。どの時代でも、焼きものづくりに懸ける陶工の思いは消えることはありません。日常生活に溶けこんだ、砥部焼の何気ない存在感。そこには歴史や人々の思いが込められています。



大正から昭和時代の砥部焼

時代の変化に応じて砥部焼の中心となる製品も変化しました。火鉢や花器・食器が中心だった時代、一升壺・すり鉢・汁茶碗・汽車弁用茶器・碁子が中心だった時代もありますが、昭和四十年代の民芸ブームをうけ、砥部焼は全国区の人気になり江戸時代の呉須染付の器づくりへ回帰しました。そして民芸調の食器を中心に、花器・水盤・置物などがつくられています。

さて、砥部焼と一口に言っても、いろいろな種類があります。清らかですっきりした白磁と呉須（藍色の顔料）の調和した染付、細やかな筆使いと多くの色を用いた華やかな錦絵、あたたか味のある淡黄磁、澄みきった水の涼しさを思わせる青磁などです。どれもひとつでも、格調高いデザインと、やや厚手の素朴な形と材質の硬さが、砥部焼ならではの独特の持ち味となっています。また、手描染付の伝統を守っていることもその特色といえるでしょう。昭和五十一年には、国民生活に豊かさや潤いを与える伝統的工芸品に指定されています。

成熟編

広がる砥部焼の世界



■ 椿彫

ろくろで型をつくり、やわらかいときにヘラで模様をつける。





飛躍編

～若い力が生み出す
独創的な世界～



砥部焼の歩み

伝統的な白磁、染付や青磁ばかりでなく、上絵具や下絵具を使った色絵の作品や、アイデア溢れるデザイン、メルヘンチックなものなどが若手の陶工たちによって作られ、観光客をはじめ消費者の人気を集めています。



平成、そしてこれからの砥部焼

私達日本人の食文化が今急激に変わっています。それとともに、厨房機器も日々進化しています。

このことが、私達の食卓を彩る器のアイテムやデザインを変えています。そして台所に立つ人の価値観と美意識を共有する女性の陶工の活躍が年々目覚しくなっています。言うまでも無く、男性の陶工も砥部で、あるいは全国から、砥部焼に魅せられ、新しい砥部焼づくりに情熱を燃やしています。

磁器創業の昔から砥部焼は開かれた産地であり続けています。砥部焼は、本来の特徴である白磁に染付を基調としながらも、さまざまな個性あふれる作品を生み出す陶工たちの窯場として、用の美を追い求めています。



砥部焼が

一、採石



町内川登・満穂・上尾などから、粗面岩質安山岩の陶石化したものを採石します。

二、製土



地元産の陶石で、坏土（焼きものの材料となる土）を作ります。さらに、真空土練機を使い、圧縮調整した坏土の空気を抜きます。

三、成型



指先の勘で、坏土を均一にしながら厚さを一定にする熟練の技がいる仕事です。

四、削り



成型後、生乾きの時に削ったりサンドペーパーで磨いて仕上げます。

五、乾燥



天日や余熱利用で乾燥させます。

六、素焼



窯に入れ、900℃～950℃で8～10時間かけて焼きます。

七、下絵



主に手描きで絵模様をつけます。

八、施釉



下絵付をしたものの上に釉薬をかけます。

九、本焼



施釉したものを1300℃で15～24時間かけて焼きます。

十、完成



砥部焼の完成です。

出来るまで

砥部焼 の歴史年譜

- 1771年
(明和八年) 麻生と神崎などの間に水論争が起る。
- 1775年
(安永四年) 加藤泰候が磁器創業を家臣加藤二郎兵衛光敏に命じ、門田金治(麻生)、杉野丈助(麻生)を起業にあたらす。
- 1777年
(安永六年) 10月、杉野丈助が、筑前に行き、釉石および釉薬を購入する。11月5日砥部帰村。12月10日新釉薬を使用し、初めて磁器焼成に成功する。大洲藩上原窯を門田金治に譲る。
- 1818年
(文政元年) 向井源治が、川登陶石を発見する。
- 1848年
(嘉永元年) 井岡太蔵が、トンバリ(レンガ)を使って筑窯を始める。
- 1851年
(嘉永四年) 城戸源六が、素焼窯を本焼窯の上部に築く方法を始める。
- 1857年
(安政四年) 瀬戸物役所(大洲藩)を郡中に設置する。唐津役所(新谷藩)を岩谷口村に設置する。唐津問屋を岩谷口村に設立する。
- 1878年
(明治一年) 伊藤允讓が、型絵付法を肥前から陶工を招いて伝習する。伊達幸太郎を京都に派して西洋絵具使用の彩画描金法を伝習する。
- 1885年
(明治八年) 向井和平が、城戸徳蔵と清国に初めて砥部焼を輸出する。
- 1888年
(明治二年) 「下浮穴伊予両郡陶磁業同業組合」(現組合の前身)を設立する。



- 1890年
(明治三年) 向井和平(愛山)が淡黄磁を創製する。
- 1893年
(明治六年) シカゴ世界博覧会に砥部焼の淡黄磁(作品)を出品し一等賞にがやく。
- 1906年
(明治三九年) 陶器補習学校を設立する。
- 1942年
(昭和十七年) 陶祖碑(杉野丈助)を建立する。
- 1953年
(昭和二十八) 柳宗悦、浜田庄司が、陶芸指導のため来砥する。
- 1976年
(昭和五一年) 砥部焼が国の伝統的工芸品の指定を受ける。
- 1977年
(昭和五二年) 砥部磁器創業二百年祭を開催する。
- 1984年
(昭和五九年) 第一回砥部焼まつりを開催する。
- 1989年
(平成元年) 砥部焼伝統産業会館が完成する。
- 1995年
(平成七年) 砥部焼地球儀「生命の碧い星」をジュネーブの国連欧州本部に寄贈する。
- 1998年
(平成一〇年) 窯業団地(陶里ヶ丘)が完成する。
- 2002年
(平成一四年) 砥部焼陶芸塾を開講する。
- 2005年
(平成一七年) 愛媛県指定無形文化財に砥部焼が指定され、その保持者として酒井芳人氏が認定される。
- 2015年
(平成二七年) 愛媛県指定無形文化財「砥部焼」の技術保持者として工藤省治氏が認定される。



砥部焼の先達

- 加藤泰候 かとうやすとき
磁器創業という砥部焼にとって画期的な事業を命じた。
- 門田金治 かどたきんじ
磁器創業時、事業遂行の主幹としてその経営全般にわたって指導した。
- 杉野丈助 すぎのじょうすけ
砥部の地で初めて磁器焼成に成功し、大南・陶祖ヶ丘に祭られている。
- 向井和平(むかいわへい)
砥部焼中興の祖で、砥部焼の名品・淡黄磁で有名。
- 伊藤允讓(五松斎)
(いとういんじょう)(ごしょうさい)
五本松の庄屋。錦手の作品で、砥部焼の美術的面の向上に貢献した。

- 伊達幸太郎(だてこうたろう)
「愛媛県伊予国下浮穴郡砥部磁器業誌」の著者で、京都に学び、西洋絵付技法を砥部に伝えた。
- 寺内信一(半月)
(てらうちしんいち)(はんげつ)
砥部工業学校初代校長として陶業教育に従事、幾多の人材を養成した。
- 梅野鶴市・武之助
(うめのつるいち・たけのすけ)
親子二代にわたって梅野精陶所の社主として、砥部焼に民芸の心を注入し、現代の砥部焼の確立と繁栄に導いた。
- 中元寅義(竹山)
(なかもととらよし)(ちくざん)
山田岩男(白水)
(やまだいわお)(はくすい)
野本正光(星黄)
(のもとまさみつ)(せいおう)
三人は昭和五年、砥部町無形文化財保持者に認定され、砥部焼の更なる発展と後進の指導に努力した。

各地に残る史跡と



2 砥石山



1 陶祖・杉野丈助の碑

窯の分布

古い時代の窯の分布

陶器を焼いた頃の古い窯跡は北川毛・大南の丘陵にあります。磁器の時代に入つては、五本松地区の上原窯、向井窯、伊藤窯などの有名な窯がありました。大南地区には御旅窯をはじめ大塔窯、福岡窯など藩政期以来の窯跡が多くありました。その後岩谷口・川登などに窯経営が始まりました。現在は大南・五本松に多くの窯があり、その他北川毛・川登・外山・高尾田など町内各地に百余りの窯があります。

窯跡および

現業窯所在地(□の中)、
江戸中・末期の開窯の例示

砥部焼ミニ資料館

歴史の中にはその時代の風土や人にまつわる物語があります。砥部焼にまつわる話の中から、いくつかご紹介いたします。

◆「砥部」の地名の由来

外山の砥石山の砥石屑が初期の磁器の原料となりましたが、この砥石山が外山の地名になり、砥部の地名の起こりになったようです。

◆焼きものの作りに適した砥部町

砥部町は山に囲まれた傾斜地の町です。これは山の斜面を利用して築かれる登窯に最適でした。また、一回の焼き上げに五十〜六十トンも要つたと言われる燃料の赤松は周囲の山々からたくさん採れました。また、水源にも恵まれ、山麓を流れる砥部川とその支流の

◆子規と砥部焼



正岡子規には「陶器」と題した短歌が十首ありますが、砥部焼を詠んだものは次の一首です。「砥部焼の乳の色なす花瓶に梅と椿とともに活けたり」

(明治三十三年作)

◆井上正夫と砥部

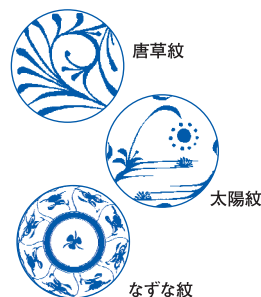
町内の陶器問屋に奉公していた少年時代から芝居好きだった井上正夫は、新派の俳優として大成した後、松竹の大谷社長の後援で、八木隆一郎の脚本による、砥部焼窯場にまつわる劇で主演したこともあります。



井上正夫の碑

◆砥部焼の絵柄

シンプルで飾り気のない線が魅力の砥部焼。呉須絵のモチーフは自然を手本にしたものが主流です。躍動感あふれる唐草紋、太陽とツルをモチーフにした太陽紋、すらりとした曲線が印象的ななす紋。そして現在では、これらの伝統的な砥部焼の枠にはまらない柄や色づかいを取り入れた新しい砥部焼も注目を集めています。



ひろがる・とびたつ アートな砥部焼

砥部焼の里に新しい風が吹いています。砥部の里から各地へアートな風をおくっています。創作の活力は伝統の枠をとびこえて、個性的なスタイルと美を生み出しています。街を、通りを、空間を彩るアートな作品に触れてみませんか。新しい砥部焼の魅力発見です。



砥部焼の里の魅力をアピールするため、大南商店街を中心に60基もの砥部焼オブジェを置いています。個性的で表情豊かな焼きものが町の風景に溶け込んでいます。



商店街を彩る 砥部焼オブジェ

大胆スケール& のびのびスタイルの モニュメント

とべ温泉 湯砥里館の陶壁画

一面に砥部焼の陶板による、壁画が描かれています。



陶板の道

遊歩道に様々な絵柄の陶板が埋め込んであります。

食器の分野をとびだして、都市空間を演出する大掛かりな作品も次々と誕生しています。巨大陶製モニュメントやデザイン陶壁など、砥部焼の新しい魅力が開花しています。

陶街道五十三次

砥部焼の里めぐりにユニークなプランがあります。砥部町に点在する「自然・歴史・文化・砥部焼」にちなんだ五十三のポイントをめぐるスタンプラリーです。回り方も、日程も自由。各ポイントに置かれたスタンプを「しらべ帖」に押していきます。じっくりと自分のペースで焼きものの里の魅力を味わえます。



■すべてのポイントを回ったら手に入る
砥部焼製コースターと
ステッカー

新たな
砥部町の
楽しみ方

■置いている場所によって
絵柄が異なるスタンプ台。



砥部焼ニューウェーブ

若手作家や女性の作家が砥部焼に新風を吹き込んでいます。伝統の技と新しい感覚が融合して生まれる作品の数々。砥部焼の愛好者の層も広がっています。



人々の暮らしに密接して育まれてきた砥部焼だからこそ、入門への窓口も広がっています。女性ならではの感性で彩られた、実用に則しながらも、柔和で温かみのある作品や、新進気鋭の若手作家たちによるセンスが光る作品群もその象徴のひとつです。



砥部焼に吹く 新しい風

■砥部焼に関する年間イベントスケジュール

4月(第3土・日)	砥部焼まつり
	砥部焼全窯元の作品約10万点を一堂に集めた大即売会をはじめ、新作展・物産即売会などが多彩に繰り広げられます。
11月(第1土・日)	砥部陶街道文化まつり
	芸術作品の展示や各種芸能発表会を開催します。砥部焼など町の特産品や農産物加工品の販売も行います。
	秋の砥部焼まつり
	砥部焼の窯元自らが露店にて対面販売を行います。

■砥部焼についての参考文献

- 砥部町教育委員会(昭和44年)／砥部焼の歴史
- 大内優徳編(昭和52年)／砥部焼とわたし
- 愛媛県高教研社会部地理部門(昭和54年)／愛媛県の地域調査報告集・砥部町地理共同調査
- 伊豫銀行(昭和51年)／飛躍期を迎えた砥部焼
- 伊予陶磁器協同組合(昭和55年)／昭和五十四年度活路開拓調査指導事業部報告集
- 愛媛県(昭和56年)／地場産業実態調査報告書
- 穂岡謙治(昭和43年)／陶磁器工業の立地と生産構造、愛媛の地理第二号

■砥部焼に関する施設



砥部焼伝統産業会館

砥部焼の歴史的資料や優れた作品を展示しています。歴史的な作品から、現代の作品まで幅広く、砥部焼の変遷が作品を通して見ることができます。愛媛県伊予郡砥部町大南335 TEL089-962-6600



砥部町陶芸創作館

砥部焼を実際に自分の手で創ることができます。粘土から作るコースと絵付けをするコースの2通り。完成品は取りに行くか、発送してもらうことができます。愛媛県伊予郡砥部町五本松82 TEL089-962-6145



砥部焼協同組合

砥部焼唯一の産地組合。ここでは、坯土製造、石膏型製造、釉薬調整など共同設備でつくられた原料を各窯元に供給しています。愛媛県伊予郡砥部町大南604 TEL089-962-2018

- 愛媛県(昭和57年)／伝統を核とした土からのまちづくり・砥部
- 砥部町教育委員会(昭和52年)／砥部焼のしおり
- 砥部町誌(昭和53年)
- 山本典男(昭和61年)／砥部焼磁器史・上
- 愛媛相互銀行(昭和62年)／砥部焼について(ひめぎん情報No.99)

砥部町

〒791-2195

愛媛県伊予郡砥部町宮内1392番地

TEL (089) 962-2323 (代)